

## 芸術におけるアフォーダンスを理解し、 創造性の真髄に迫る

佐藤由紀 研究室



### 研究内容

James J. Gibson (1904-1979) というアメリカの知覚心理学者が始めた生態心理学 Ecological Psychology という学問があります。彼は、私たちが歩いたり、走ったり、座ったり、珈琲を飲んだり、ヒトと話したりする行為の意味を、環境と身体とのインタラクションから考えようとした心理学者です。Gibson は特に視覚、私たちがどのように世界を「見て」いるのかに興味を持ち、私たちが何かを「見る」とき、一定の明るさ ambient light と空気 medium と面 surface に取り囲まれていることに気がきました。ぐるりと周りを見渡すと、そこには必ず面がある。自身が移動していくと、周囲の面の変化（例えば後ろに隠れて見えなかった面が見えてくる）と不変（例えば、長方形の机であること）が同時にわかる。つまり、私たちは自身が移動していることと周囲の環境 surroundings を同時に特定しながら歩くことができるのです。周囲には意味があり、その意味をピックアップしながら私たちは行為している。彼は自分がみつけた知覚の理論を「直接知覚論」と名付けました。



VTS 実験風景

私の研究テーマの一つは、この Gibson の理論を礎にしつつ、アート（演劇、ダンス、映画、絵画、彫刻、写真、音楽、大道芸、インスタレーション等）について考え、それぞれの表現の意味を探ることです。非常に大きなテーマですので、一筋縄ではいきません。現在は、芸術という存在と目的について、分析美学を手がかりに院生さんたちと一緒に考え、そこから Gibson の理論へと橋渡しするためには、どのような分析方法があるのか、を検討しています。

具体的な研究としては、一人芝居をつくりあげる俳優の身体と、舞台上の環境のインタラクションに注目し、俳優が生み出す舞台上の「アフォーダンス (Gibson, 1979)」を、発話、ジェスチャーや視線、うなずきといった非言語情報等のマルチモーダル分析等から探っています。

佐藤 (2006) では、プロの俳優であるイッセー尾形の発話構造を分析し、視線とジェスチャーの入れ子構造が反転するとき、演技行為の宛先の転換をしていること等を示しました。また佐藤 (2012) では、俳優の一人芝居と成人男性の課題説明場面の非言語情報を中心とした発話構造を比較しました。ジェスチャー単位 (細馬, 2009) の持続時間や構造、ビート (McNeill, 1987) のリズム性 (McClave, 1994) については共通していたが、ジェスチャー単位に含まれるジェスチャー句数の少なさや、ジェスチャーに使用する手の左右の優位差のなさ、指さしの多用が俳優の特性であることを示し、この特性が、舞台表現の独自性へと通じる可能性があることを指摘しました。

もう一つの研究テーマは、社会における希望の意味を考えることです。上記のアート研究といっけん関わりのないテーマにみえますが、希望は私たちが芸術を求める意味と深く関わっていることが、最近わかってきました。岩手県釜石市や福井県池田町等へいき、その地域に根付

く祭礼やイベントを調査し、市民や町民の希望とどのように関わっているのか、をインタビューや観察から考えています（佐藤、2013、2014；佐藤・大堀、2020）。



岩手県釜石市でのインタビュー調査

私は、芸術にかかわる現象に対して、既存の学問手法を参考にしながら、いくつかの学問領域をつなぐことで初めてみえてくる意味や意義を追究したいと考えています。フロンティア的な研究が多いため、まずは現場にで大量のデータを取り、その研究の分析単位や手法をみつけるところが始めることがほとんどです。また、実験をおこなう際も、なるべく生態学的妥当性を考慮し、知りたい現象と近い設定をしています。例えば演劇の製作過程であれば、プロの俳優やシナリオライターに協力をしてもらい、なるべくプロの現場に近い状況をつくりながら、その製作過程をデータとして収録しました。



一人芝居の創作実験

現在は、他大学の研究者と共同研究として演技の分析単位の検討をおこなったり、岩手県釜石市や福井県池田町に行つてその町の変遷と希望の関係を行政資料やイン

タビューから探ったりしています。またここ数年、脳科学研究所の高岸治人先生らと創造性 creativity の研究をおこなっています。創造性の定義を再検討しながら、脳機能との関わりについて考究しています。

学部ゼミには、リベラルアーツ学部の3・4年生が所属しています。観察やインタビュー、実験等の心理学的な手法を中心に、アートを科学的視点から分析し、その枠組みや構造の変化ないし熟達を記述することを中心課題としています。ゼミは、芸術にかかわるようなテーマを推奨していますが、「自身がとことん知りたいと思っていること」があり、それを、心理学的手法を中心に考えたいという学生にも門戸を開いています。ゼミ所属希望の学生には、面談の際、自分で自分の知りたいと思っていることの専門家になる覚悟があるかをたずねています。



学部ゼミの風景

ゼミの運営の責任は指導教官である私が負いますが、「とことん調べ、とことん話し、とことん考える」ことをゼミのモットーとし、基本的にはすべて学生が進行をおこなっています。3年生の最初はなかなか議論にならないですが、だんだんと議論をする大切さに気付き、活発な質問や意見が交されるようになっていきます。個性的な学生たちの多く集まるゼミですが、4年生の終わりには不思議と同志のような雰囲気になっています。卒業論文を執筆して研究する喜びに目覚めてくれたのか、大学院や他大学へ進学する学生もでてきています。

## 略歴

2011年東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。博士（学際情報学）。明治学院大学大学院文学研究科・

非常勤講師、立教大学現代心理学部・兼任講師、東京大学社会科学研究所・特任研究員を経て、2012年より玉川大学芸術学部・准教授、2014年より同大学リベラルアーツ学部へ移動、2017年より現職。2019年は神戸大学大学院人間発達環境学研究科・学外研究員として長期研修をおこなった。

所属学会は、日本生態心理学会、日本映像学会、日本演劇学会、日本認知科学会、日本質的心理学会、人口知能学会、International Society for Ecological Psychology（国際生態心理学会）、International Society for Gesture Studies（国際ジェスチャー学会）等。

## 参考文献

- Gibson, James J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Psychological Press.
- 細馬宏通 (2009). ジェスチャー単位 坊農真弓・高梨克也 (編著) 多人数インタラクションの分析手法 オーム社 pp. 119-136.
- McClave, E. (1994). Gestural beats: The rhythm hypothesis. *Journal of psycholinguistic research*, 23(1), 45-66.
- McNeill, David (1987). *Psycholinguistics: A New Approach*. HarperCollins College Div.
- 佐藤由紀 (2006). 一人芝居の身体—イッセー尾形の1分間 佐々木正人 (編著) アート／表現する身体—アフォーダンスの現場 pp. 55-85.
- 佐藤由紀 (2012). 俳優は演技において発話と身体の組み合わせをどのようにデザインしているのか 芸術研究 4, pp. 1-12.
- 佐藤由紀 (2013). 伝統とは信頼を賭けること 東大社研他 (編) 希望学あしたの向こうに pp. 342-351.
- 佐藤由紀 (2014). 点と点、そして点 東大社研他 (編) 〈持ち場〉の希望学 pp. 282-302.
- 佐藤由紀・大堀研 (2020). つながること、つづけること: 「まつり」を復興する意味 東大社研他 (編) 地域の危機・釜石の対応 in press